

# モダン・タイムス

原題：MODERN TIMES



1936年／アメリカ／89分／モノクロ

脚本・監督：チャールズ・チャップリン

撮影：ロリー・トザロー／アイラ・モーガン

美術：チャールズ・D・ホール / ラッセル・スペンサー

作曲：チャールズ・チャップリン

キャスト：

職工 ……チャールズ・チャップリン

浮浪少女 ……ポーレット・ゴダード      社長…アラン・ガルシア

キャバレーの主人……ヘンリー・バーグマン

機械工 ……チェスター・コンクリン

1938年シネマ旬報第5位

---

## I はじめに

今日は後ろにパーティがあり、例年だと 60 分前後の作品を選ぶのですが、今回の『モダン・タイムス』は 90 分近いものなので、解説はしません。

この資料で済ませたいと思います。

私もこの映画は個人的な思い出が深いのですが、それは後にして、今日、参加して下さった木村結さんからは次のようなメールを

——『モダン・タイムス』素晴らしい映画ですね。

私の父は無声映画の弁士になりたかった人で、

私の記録動画を撮っては近所の人を集めて上映会を開催していました。

当時の 8m アニメで人を集めては自分の作品を見せるという手法で。

我が家の家電製品は殆ど父のカメラ作品の副賞でした。

娘と孫との約束で参加はできませんが、と吉井ちづ子さんからのメールは

——『モダン・タイムス』は昔観たことがあります、印象に残ったシーンの一つが、チャップリン演ずる主人公が食べるお昼ごはんの豊かさでした。機械に酷使されてぼろぼろになっているとされている労働者の食べているモノが、当時の日本と比べて、(あるいは現在の日本でワーキングプアと言われている人の食事と比べても)、ずっと豊かであるのに驚いたものです。確か中味の一杯詰まったサンドイッチだったと思いますが。チキンもあったか？

また、精神障害者支援の忘年会で欠席との連絡を下された森田政之さんは、映画を尼崎市のお姉さんと一緒に見ると

——本年は『13 デイズ』しか観られませんでした、来年もお知らせメールは頂きたいお願い申し上げます。

私は年初より兵庫県尼崎市に独居する 87 歳の姉の世話で毎月往復し 10 日ほどを共に過ごしています。映画が好きで M・クリフト、両ヘブバーンや原節子、高峰秀子等、昨年は 1 日 3 本も観ることも有りましたが、最近は認知症のため一本の映画を終いまで観る力もなくなりドラマの筋も追えなくなってしまいました。寂しいですが、でもテレビに昔のスターが躍動していると夢中になり元気が出るようで、鑑賞後のトークに花が咲きますので私はツタヤ通いです♪

常連の横山弘治さんからは

——『モダン・タイムス』チャップリンは大好きな映画です。

ベルト・コンベアーのスピードが次第に速くなると、主人公がアタフタする、まさに現代の先を見据えた 映画でした。

私の個人的な思い出は案内にも少し書きましたが、1958 年の 7 月上旬、小学校 4 年生のときに、北海道の栗山町の洋画映画館でこの『モダン・タイムス』と『砂漠は生きている』を父親と一緒に観ました。

その日の朝、『北海道新聞』を読んでいた父が「おや、チャップリンの映画が来ている。

前に観たけど、とても面白いぞ。一緒に観に行こうか」と言いました。私は平日なので学校がある、と答えましたが、多分、授業なんかより大切なものがある、と父は言って学校のことなど全く気にしませんでした。

4キロの道を歩き、国鉄に乗って3つ目の栗山町の映画館で観たのでした。栗山の高校に5年後に入学、その同窓の橋本英子さんが今日、参加してくれています。

この映画が日本で公開されたのは、作られてから2年目の1938年（昭和13年）でした。調べてみると、キネマ旬報ベスト10で洋画の部で第五位。当時、私の家は東京でしたから、父はその時に観ていたのだと思います。

双葉十三郎さんの『外国映画ぼくの500本』（文春文庫）には——恐慌後の苦しい生活を送る人々を代弁し、アメリカの文明、社会を痛烈に批判した映画だ。一方で、パントマイム芸術の集大成であり、絶妙の芸人ぶり（初めての歌による発声）を堪能できる映画でもある。米国はおろかヨーロッパでもこの名画に反感を示すひとが多かった。もっとも評価が高かったのは、彼を愛し理解している識者の多かったわが日本であろう。

当時、左がかった父は、多くの日本人と同じくこの映画を高く評価したのだと思います。私にとっては、映画の内容がどうということより、学校に行く以上の価値が映画にあり、そのことを父親に教えてもらったということの方が、とても大きかったのだと思います。

そのことが映画好きを一層強め（小学校1年で『七人の侍』や『二十四の瞳』は観に行っていました）、今に至っているのかな、と思います。

『黄金狂時代』の解説に書いたような気がしますが、これも大塚の名画座に両親と一緒に20代後半の頃、観に行ったことがあり、チャップリン好きは続いていました。

なお、『大アンケートによる洋画ベスト150』（文春文庫ビジュアル版・1988）では、16位です。そのコメントで「この映画が撮られたのは半世紀以上前だが、その時代より現代のほうが確実に不自由になってきているのではないか」（松本伸夫・毎日編集委員）とありました。

このアンケートでは、チャップリン作品は『黄金狂時代』（1925）が15位、『チャップリンの独裁者』（1940）が24位、『キッド』（1921）が60位となっています。

『独裁者』を除いて、映画会倶楽部で取りあげたことになります。

## Ⅱ モダン・タイムスで描かれていて気になること

先に引いた吉井さんのメールにもありましたが、1936年当時（日本では2・26事件と阿部定です）のアメリカの労働者の食事です。

私はコーヒー（多分）を入れて持ってきていた携帯ポットが気になりました。いまでも、マイ・ポットを持ち歩く人は多くなりましたが、その当時には想像できなかったのではないのでしょうか？

携帯ポットでちょっと思い出があります。

15 年ほど前だと思いますが、ロンドンから南に向う電車に乗っていたときに、寝坊して朝食を取れなかったらしい若い勤め人が、車中で携帯ポットから紅茶を注ぎ、バナナを出して齧っていたことです。質素な朝食が微笑ましかった。

もう一つは覚醒剤が刑務所内で使われたシーンです。

アメリカの麻薬の歴史は古いぞ、とってしまいました。

あとは、監視テレビですね。

いまや、街中に監視カメラが設置され超管理社会が既に作られてしまっていますが、この映画の先取りは凄い。特にテレビ画面が大きく、鮮明で（この時代に実用化などはされていません）、社長の指示のときには音がでるといふ、効果的な使われ方でした。

ベルト・コンベアーに象徴される機械文明は、アメリカ資本主義の生産力を高める方式でした。フォードは 1927 年まで 20 年間モデルチェンジを行わない、フォードモデル T を 1500 万車も生産します。ラインを流れる車の組み立てで、価格は劇的に安くなりました。

この映画で戯画化されたこの方式はいまや、生産だけでなく流通の分野まで覆いつくしています。

現在のより緻密化し、高度化するシステムはコンピューターの登場によって可能となりましたが、これからの問題は人工頭脳（AI）が、私たち人間の労働の質を変えていくか、人間に働く場は確保されるのか、ではないでしょうか？

何とか人工頭脳の問題を理解しようと、NHK・E テレの『人間ってナンだ？超 AI 入門』を録画してありますが、全 12 回のうち、まだ 2 回しか観ていません。

しかし、何年か前から囲碁ソフトで遊んでいる経験から、私たちと違ってその学習能力の高さは凄まじいです。

多分、私たちの予想をはるかに超えるスピードで、AI は人間社会を変えていくだろうと思います。

かつて、疎外論が流行したことがあります。AI はある意味、究極の人間疎外です。

アメリカ共和党が大統領選挙で使い始めたビッグデータが私たちのプライバシーから政治性向までを丸裸にする事態とともに、コンピューターと人間の関係をこの映画会でも問い続けて行きたいと思っています。

話が硬くなってしまいました。

### Ⅲ チャップリンに関連して

1936 年には世界の映画はトーキー化されていました。でも、この映画はサイレント。チャップリンが踊りながら歌うシーンで音声があります。「ティティナ」という誰も解読できない造語で作詞された曲です。

この曲はチャップリンの作曲ではありませんが、その後に歌詞はありませんが『スマイル』の曲が流れます。後にトニー・ベネットやマイケル・ジャクソンなど数え切れない歌

手にカバーされた曲です。

この曲を聴くと、チャップリンの作曲の才能につくづく感心させられます。

チャップリンについては、資料の井上一馬『アメリカ映画の大教科書（上）』をお読みください。

貧しい生い立ち、不幸な両親、破格の報酬、

「お客があまりにも激しく笑うために、チャップリンの映画を二週間も上映したあとは、客席のボルトを固く締め直さなければならなくなる」という何人もの映画館主の話は、チャップリン人気をリアルに実感させられるエピソードです。

また、チャップリンの三人目の夫人、ポーレット・ゴダードについても、一緒に神戸港を散歩した淀川長治の思い出などを資料にしてあります。

資料の出典は分かるようにしてありますが、何も無いのは映画のパンフレットのもので、ただ、1972年（昭和47）に東和45周年でチャップリン映画を上映した際のもので、その時代を念頭に置いて読んでください。

さて、2018年1月は28日が第四土曜です。

久々に邦画のシリーズも良いかな、と考えていますが、とりあえずアトム・エゴヤン監督の『手紙は憶えている』（2015年／カナダ・独）はどうでしょう。

認知症とナチへの復讐を重ねた作品で、今日参加されている前田哲治さんが「衝撃的でした」とメールしてくれました。（了）